

## 31 医僧・大日方大乘の略伝

中 西 淳 朗

神奈川県保険医協会

昨年の本学会第一〇五回総会は、横浜市鶴見区の総持学園の施設を中心に展開された。キーワードをあげるならば、医史学、横浜、曹洞宗であった。今回、演者は同じキーワードで結ばれる人物、医師にして僧侶であった大日方大乘の略伝を報告する。

大日方大乘は明治十年（一八七七）十二月十七日、北信に生れた。詳細は不明である。

明治三十三年七月、東京慈恵医院医学校を卒業し、胃腸病院、北里研究所、日本赤十字病院で研修した。そして明治二十五年四月に開設された横浜市中区西竹之丸の横浜婦人慈善協会病院（以下慈善病院と略す）の内科医長に迎えられ、後に院長となった。

この病院は横浜プロテスタント・メソジスト派の婦人信者が中心となって、義損金を集めて運営されてい

た。しかし経営は赤字続きのため、明治三十四年（一九〇一）に人事を刷新し、地域救療を含む事業に交換した。

大日方医師はその頃就職したものと考えられる。二年后には市の施療切符制度を導入している。当時の患者統計を示しておく。

入院 外来

明治三十三年 九七名 一、六一一名

三十六年 一五一名 一〇、三六一名

四十年 一六四名 一三、一三八名

四十四年 一五九名 一五、四〇一名

診療自体は順調にす、むほど、経営赤字は拡大する形となり、メソジスト派慈善婦人協会による病院維持は困難となった。

折から四十三年五月に大逆事件が発生し、その後、恩賜財団済生会が誕生するに及んで、慈善病院は済生会より事業を委託されることになった。しかし院内に経営一本化の声があり、大正二年（一九一三）九月に至り敷地、建物、有価証券等を済生会へ寄付し、慈

善病院は解散となり済生会神奈川県病院が生れた。この時、大日方大乘は依願退職した。

彼は同年十二月、日本郵船会社に入り船医となった。

三十七才であった。半年後、セイロン島のキャンディ仏歯寺に参詣し、大医王釈迦牟尼如来像を授けられた。

帰国後開眼供養を行い、以後毎日、焼香し礼拝した。

昭和五年、総持学園鶴見女学校（校長・中根環堂）あげての「ハワイ・モロカイらい療養所で觀世音の慈光を求める同胞の為に」というカンパニアが行われ、山本瑞雲氏によって一尺八寸の桧一本作りの觀音像が作られた。この木像を大日方船医は自分の船室に安置し、モロカイ島のらい療養所へと置いた。

昭和十年三月、大乘氏は得度して僧侶となり、同十二年七月に満六十才を前に超満期退職をした。（日中戦争勃発で勇退か）以後、駒沢大学、大本山総持寺等で仏教学を修め、同十七年から駒沢大学及び高校の校医、講師をつとめ、十八年に曹洞宗正教師となった。

戦後は栃木県、静岡県の寺院住職となり、その間、仏教医学を研究した。昭和三十三年に『仏教医学』、同

三十七年に『仏教衛生学』、続いて四十一年に『仏看護学』を著わしている。また三十九年には『南海寄帰内法伝における医学的資料』と題して、印度ナーランダ寺へ留学した中国僧・義浄三蔵の著作「南海寄帰内法伝」から、一、衣食所須、二、便利之事、三、洗浴随時、四、臥息方法、五、経行少病、六、除其弊薬の六項を抽出し、現代医学的見解を加えた附説を書き、『仏教医学』を書き改め、それらを『仏教医学の研究』として発刊した。八十八才であった。

さらに九十才を過ぎてから、東洋薬報に『強健五則』の解説を二十三回連載した。

昭和四十五年十一月二十四日、遷化。満九十三才一ヶ月であった。

（後記） 宮林昭彦、加藤栄司両氏は前記六項に、衣服のきまり、トイレのきまり、洗浴の方法、寝具と尊像安置、腹ごなし漫ろ歩き健康法、中国の悪薬への批判という現代語訳を加えている。なお一から五までを医僧・大日方大乘は『強健五則』と呼んだ。